

う ら ぼ ん え
ぶつきょうつうしん 仏教通信 「乞食(こつじき)と盂蘭盆会」 7月 がつ

江戸時代のことわざに「坊主と乞食は三日やるとやめられない」というものがあります。現代では「こじき」は不適切な表現であり、「一度楽な環境に身を置くと抜け出せなくなる」という僧侶への揶揄や、差別的な言葉として捉えられがちです。しかし、この「乞食」という用語を仏教の文脈で正しく解釈すると、そこには私たちが忘れがちな「慈悲」や、現代のボランティアにも通じる「利他」の精神が息づいています。仏教における「乞食(こつじき)」とは、「欲望を捨て、他者から施しを受けることで謙虚さを学ぶ修行」であり、いわゆる「托鉢(たくはつ)」と同義です。古代インドの出家修行者たちは自ら生産手段を持たず、他者からの施しによってのみ命を繋いでいました。これは、己の傲慢さを削っていき、生かされていることへの謙虚さを養う修行でした。同時に、お布施をする人々にとっても、自らの執着心を離れて徳を積む利他行でもあるのです。現在も永平寺の僧侶たちが行う「寒中托鉢」の模様を、ニュース等で観たことのある方もおられるでしょう。さて、四半世紀前の話ですが、二十代半ばの私は京都の本願寺で学んでいました。当時の課題に、京都市近郊の集合住宅を訪問して仏法を聞いていただくカリキュラムがありました。当時は地下鉄サリン事件の直後で、日本全体が強い宗教アレルギーの渦中にあった時期です。訪問説法の結果は厳しく、誰一人として話を聞いてはくれませんでした。インターホン越しに相手の嫌悪感や怪訝そうな声が響くばかりで、世間の現実を目の当たりにした私は、重たい心持ちで寮に戻ったことを覚えています。暗い顔して不満気な態度の私たちに対し、先生の講評は厳しいものでした。先生の「今まで伝統や御門徒(檀家)さんに守られてきたあなた達は、世間に出れば、誰からも相手にされない世間知らずにすぎません。そんなあなた達を、まだ世間の皆さんは生かしてくれています。そのことに気づいた今この瞬間から、仏法を真摯に学び、謙虚な心で人々に寄り添う『乞食(こつじき)』の生き方を心がけなさい」という言葉は、私たちの甘えを強く戒めるものでした。

この「乞食」によって得られる利他の精神と功德の尊さを、私たちに伝える行事こそがお盆(盂蘭盆会)です。お盆の由来には、お釈迦様の弟子である「目連尊者」の物語があります。亡き母親が餓鬼道に落ちて苦しんでいる姿を知った目連は、大変悲しみ、お釈迦さまに相談しました。お釈迦様は「7月15日の安居(雨季の集中修行)の最終日に、僧侶たちを労い、心からの施し(供養)をしなさい」と諭されます。目連がその教え通りに精いっぱい供養を捧げたところ、その功德によって母親は救われ、極楽に生まれ変わったと伝えられています。「他者のために自らを差し出す」「功德を分かち合う」というこの精神は、現代の「ボランティア活動」とも重なります。ボランティアとは、単に「余裕があるから誰かを助けてあげる」という一方通行の慈善ではありません。自らの時間や労力を差し出す(布施する)ことで他者と繋がり、自らの慢心を省みること。そして、誰かの役に立てる喜びを通して、逆に自分自身が豊かな心を「いただいている」ことに気づかされる連環の行いなのです。 「坊主と乞食は三日やるとやめられない」ということわざは、蔑みや皮肉ではなく、「仏道を求める真摯な生き方と、その修行の心地よさに触れたなら、もはや仏道をやめることなどできない」という、求道の素晴らしさを表したものと私は捉えています。言葉の由来を考えてみた時、盂蘭盆会の意義は、より一層深まると思います。今年のお盆は、形だけの先祖供養で終わるのではなく、目連尊者の物語やボランティア精神にあるような「他者を思いやる心」を大切にし、「私」たちに命を繋いでくれた亡き祖先達と身近な人々へ感謝の気持ちを広げていく仏教行事にして欲しいと念じています。合掌

